

病虫害発生予報 第1号(4月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所

＜予報の概要＞

| 作物名 | 病虫害名 | 発生量 | 作物名 | 病虫害名 | 発生量 |
|------|---------------------|----------|------|-------------------------|-------------------|
| 水稲 | ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ | 並 やや多 | 野菜全般 | 灰色かび病 アザミウマ類 | 並 並 |
| タマネギ | 白色疫病 べと病 | やや少 並 | カンキツ | かいよう病 そうか病 ミカンハダニ | やや多 やや多 やや多 |
| エンドウ | 褐斑病、褐紋病 うどんこ病 | やや少 並 | | | |
| キャベツ | コナガ | 並 | ウメ | かいよう病 | やや多 |
| キュウリ | べと病 褐斑病 | 並 やや少 | 果樹全般 | カメムシ類 | やや少 |

気象予報

1か月予報(予報期間 3月23日～4月22日 大阪管区气象台)

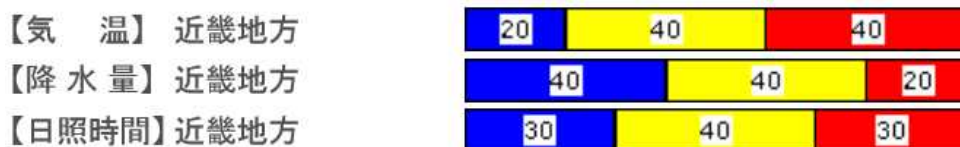
＜予想される向こう1か月の天候＞

天気は数日の周期で変わり、近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

| | 月平均気温(平年値) (℃) | 月降水量(平年値) (mm) |
|----|-------------------|-------------------|
| 4月 | 和歌山 14.9 | 和歌山 100.3 |
| | 潮岬 15.6 | 潮岬 212.7 |

I. 水 稲

1. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生時期 やや早
発生量 並

(2) 予報の根拠

① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市7.0頭、成虫率81%（平年12.9頭、成虫率51%）、紀の川市9.0、成虫率72%（平年9.3頭、成虫率35%）、かつらぎ町2.8頭、成虫率55%（平年5.4頭、成虫率28%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病ウイルスを媒介する。イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、休閑田や雑草地付近での育苗を避ける。
- ② は種時(覆土前)～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。
- ③ 田植え前から作期を通して、ヒメトビウンカの生息場所となる水田周辺雑草の除草管理を徹底する。

2. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生時期 並
発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市19.6頭、成虫率46%（平年3.7頭、成虫率49%）、紀の川市0.0頭（平年1.1頭）、かつらぎ町62.0頭、成虫率35%（平年18.7頭、成虫率41%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① は種時(覆土前)～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 白色疫病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は13%（平年24%）、発病株率は0.1%（過去8年の平均3.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一のほ場内でも発病に偏りがみられることがあるので、ほ場全体を見回り発病が集中しているところは特に丁寧に薬剤散布を行う。
- ② 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。

2. ベと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部での3月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は6%（平年6%）、二次感染株の発生ほ場率は3%（平年6%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 前年の発生が多かったほ場では本年も発生しやすいので注意する。
- ② ほ場をこまめに見回り、越年罹病株の早期発見・抜き取りを徹底する。抜き取った株はほ場外に持ち出して適切に処分し、早急に薬剤散布を行う。

- ③ 発病が認められないほ場においても予防散布を行い、二次感染が認められた場合は早急に薬剤防除を行う。
- ④ 薬剤の感受性低下を防ぐため、同一系統の薬剤は連用しない。
- ⑤ 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。
- ⑥ 平成30年度病害虫防除技術情報第2号（平成31年3月7日発表）を参照する。

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培における3月中旬の発生ほ場率は14%（平成31年31%）、発病葉率は0.2%（平成31年2.6%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 雨が多いと多発するので薬剤散布は早めに行う。
 - ② 多湿条件で発病が助長されるので、排水対策や通風対策に努める。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培での3月中旬の発生ほ場率は0%（平成31年3%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生初期から薬剤防除を行う。

<キャベツ>

1. コナガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は0%（平成31年：発生ほ場率3%、1株当たり発生密度0.01頭）であった。
 - ② フェロモントラップによる3月1～20日の誘殺数は、紀の川市4頭（平成31年9.8頭）、和歌山市48頭（過去7年の平均13.3頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① ジアミド系、IGR剤などの薬剤は殺虫効果の低下が認められている。
 - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は連用しない。

<キュウリ>

1. ベと病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は20%（過去7年の平均24%）、発病葉率は1.5%（過去7年の平均3.1%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。
 - ② 病原菌は気孔から侵入するので、薬液は葉の表裏にムラなくかかるように散布する。
 - ③ 肥効が低下したり草勢が衰えたりすると発病が助長されるので、適切な

肥培管理に努める。

- ④ 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤は連用しない。

2. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は40%（過去5年の平均42%）、発病葉率は1.0%（過去5年の平均6.9%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

② 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤は連用しない。

<野菜全般>

1. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は0%（平年2%）であった。

② 県中部の施設栽培ミニトマトでの3月中旬の発生ほ場率は0%（過去3年の平均9%）であった。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設内では湿度低下を図り、過灌水や滞水しないように注意する。

② 発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。

③ 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤は連用しない。

2. アザミウマ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培イチゴでの3月中旬の発生ほ場率は、ヒラズハナアザミウマ0%（過去3年の平均14.3%）、ミカンキイロアザミウマ0%（平年0%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は、ミナミキイロアザミウマ10%（過去5年の平均24%）、ミカンキイロアザミウマ0%（過去5年の平均4%）であった。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温の上昇とともに発生が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 初発日 5月16～25日（並）

発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病葉率は8.0%（平年10.1%）であった。

② 前年10月中旬の春葉発病の発生園率は27%（平年16%）、発病葉率は0.9%（平年0.6%）であった。

- ③ 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 罹病性品種や常発園では、罹病枝葉の剪除とともに防風施設の整備に努める。
 - ② 発芽前の薬剤防除ができなかった園では、新梢伸長期に銅水和剤（薬害軽減のための措置を講じる）を散布する。

2. そうか病

- (1) 予報内容 発生時期 並
発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月中旬のウンシュウミカンにおける果実発病の発生園率は5%（平年2%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 常発園および前年多発園では、越冬病斑の除去、発芽直後の薬剤防除に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における3月中旬の発生葉率は17.8%（平年0.3%）で、マシン油乳剤を散布している慣行防除区における発生葉率は0%（平年0%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達が問題となるため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月中旬の「富有」の発生園率は47%（平年84%）、発病葉率は7.1%（平年25.8%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発した園では、この時期の防除を徹底する。
 - ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
 - ③ 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬液は葉裏をねらって丁寧に散布する。

<ウ メ>

1. かいよう病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 3月上旬の予察ほ場（無防除、みなべ町東本庄）での2年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は4.0%（過去2年平均1.2%）であった。
 - ② 県南部（みなべ町、田辺市）の前年6月上旬の発生ほ場率は65%（平年

54%)、発病果率は2.8%(平成2.8%)であった。秋期の気象条件と併せて潜伏越冬病斑量は平成よりやや多いと考えられる。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 強風雨により感染が助長されるため、常発園では防風施設の整備等の防風対策を励行する。

② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回、抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0.1頭(前年1.5頭、平成0.6頭)、捕獲地点率は6.4%(前年61.7%、平成23.9%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

② ウメ・モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。

③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。

④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害が認められた場合は薬剤による防除を行う。

⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所(紀の川市、農業試験場内)

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在(有田川町、果樹試験場内)

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在(紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内)

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在(みなべ町、果樹試験場うめ研究所内)

TEL 0739-74-3780